

## 10) エンドウマメとソラマメ=豌豆と空豆

エンドウマメはマメ科の1年草もしくは2年草で、原産地はヨーロッパから中近東方面、現在では世界の各地で栽培されている。茎はツル性で高さは1.5~3mになり、葉は卵形の小葉を持つ羽状復葉で、先端はマキヒゲとなって支柱にからみつく。晩春から初夏にかけて上部の葉腋から長い花茎を出して、先端に紫色や白色の蝶形花をつける。豆果は長楕円形で、白色または褐色の種子を5個ほど含む。和名の由来は中国名『豌豆』の音読みである。別称としてノラマメ、ブントウ、ニドマメ、ツルマメ、サンドマメなど、さまざまな呼称がある。学名は『*Pisum sativum*』で、属名はラテン語で「エンドウマメ」のことを意味しており、種小辞は「栽培された」という意味である。イギリスでの呼称は『garden pea』、フランスでは『pois』、またドイツでは『Erbse』、中国では『荷蘭荳』である。

エンドウマメは古代ギリシャ・ローマ時代から栽培されており、中国には5世紀頃シルクロードを経て伝来し、日本には9~10世紀ごろに渡来したらしい。

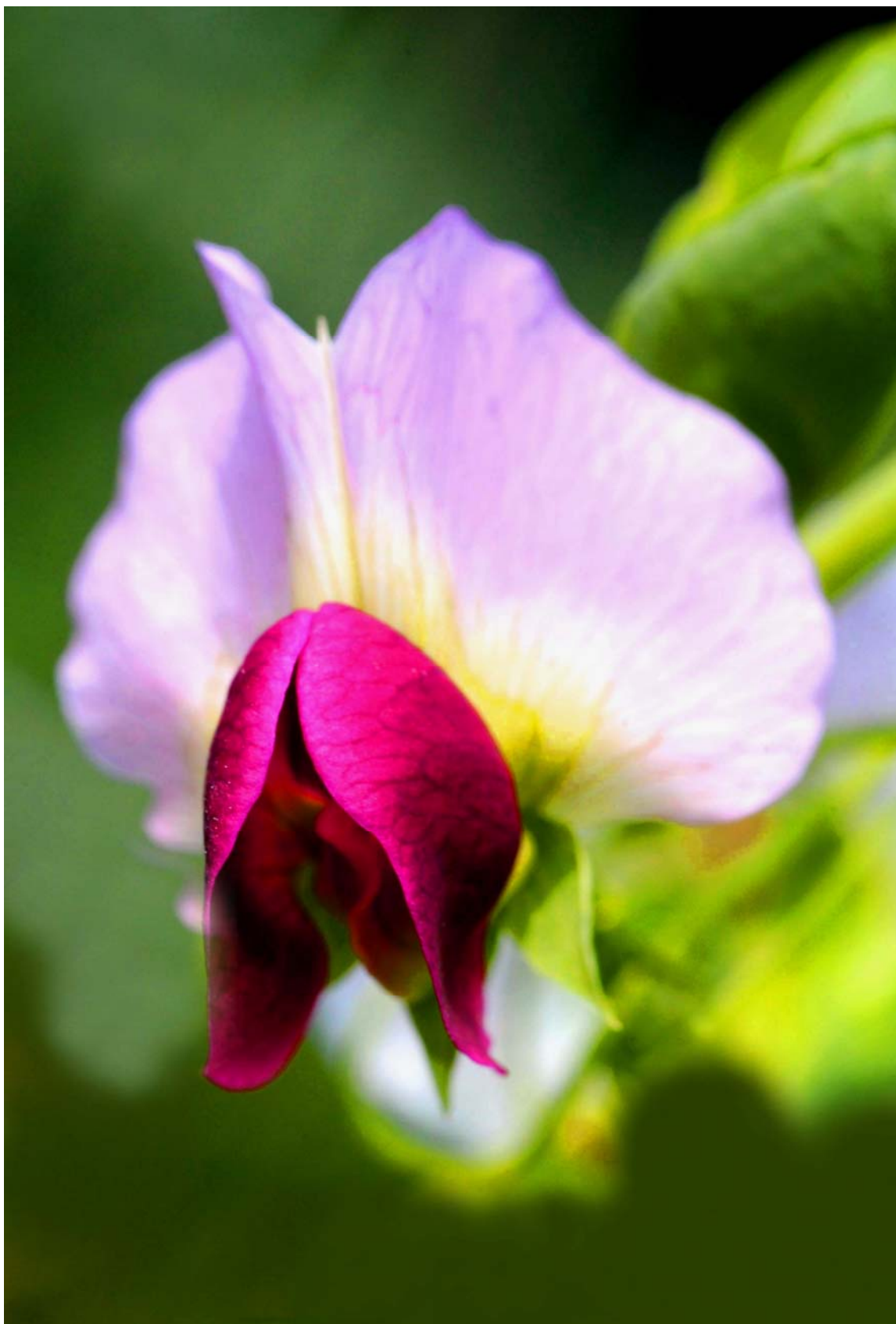
エンドウマメは大別して若い莢を食用にするサヤエンドウと、成熟した柔らかい豆を食べるグリーンピースがあり、用途に応じてさまざまな品種が栽培されている。日本ではキヌサヤエンドウとオオザヤエンドウの栽培が多く、さまざまな料理法がある。しかしエンドウマメで忘れることができないのは『メンデルの法則』である。メンデルはオーストリアの修道士で、教会の中庭にエンドウを栽培して、人工交配の実験を8年間続けて遺伝の法則を発見した。エンドウは自家受粉の植物で、一年草であるために、遺伝の実験には利用しやすく、遺伝学の発展に寄与してきた。

これに対してソラマメはマメ科の1年草または越年草で、北アフリカからアジア西南部が原産といわれ、現在では世界の各地で栽培されている。高さは40~80cm、茎は直立し、葉は偶数羽状復葉で短柄がある。春、葉腋に総状花序を出して、5弁の蝶形花をつける。大形の花は白または淡紫色で旗弁には黒い斑点がある。莢は長楕円形で上を向き、3~5個の種子を含んでいる。和名の由来は莢が空に向かってつくため、別称としてトウマメ(唐豆)、シガツマメ(四月豆)、ノラマメ(野良豆)、ナツマメ、ヤマトマメ、ペッピリマメ、イスマメなど、こちらもさまざまな呼称がある。学名は『*Vicia faba*』、属名はラテン語の「巻き付く」意で、この属にはツル性のものが多いため、種小辞はラテン語で「マメ」の意味である。またイギリスでの呼称は『broad bean』で、フランスでは『fève』、中国では『蚕豆』である。

ソラマメの栽培の歴史もエンドウマメに劣らず古く、古代ギリシャ・ローマ時代に遡り、エジプトでは広く栽培されていたらしい。日本への伝来は聖武天皇の天平8年(736年)のことで、中国から『遣唐使』によってもたらされ、行基が試作したと伝えられている。布教のため日本にやってきたポルトガル人の宣教師が、1565年に本国へ送った手紙の中で、日本の産物の一つとしてソラマメを紹介している。



サヤエンドウの花はマメ科の中でもひととき美しい(埼玉県滑川町)。

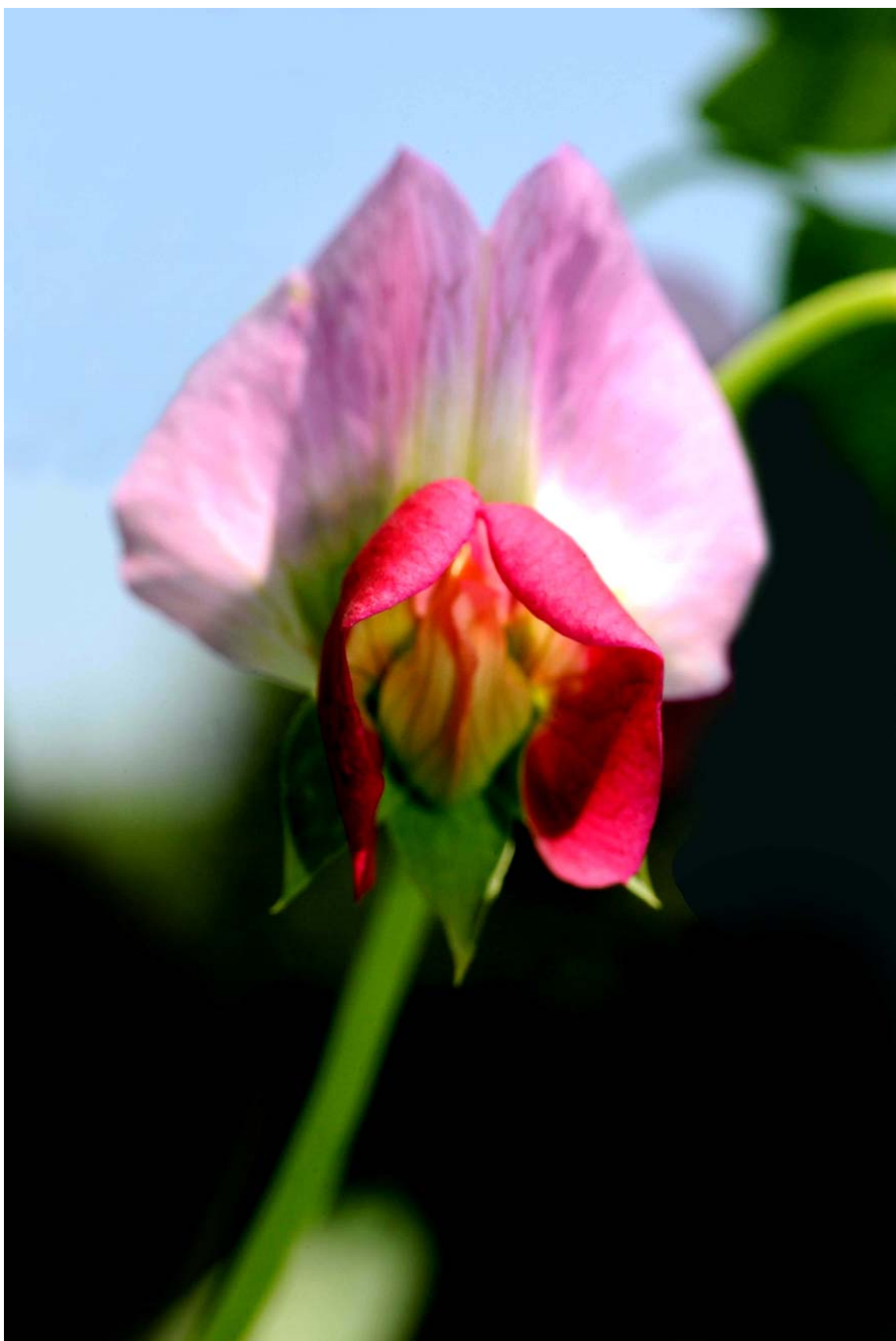


エンドウマメは野菜の花の中にあってはトップクラスの美しさである(さいたま市緑区)。





サヤエンドウの花(さいたま市緑区)。エンドウ豆は麦とともに育ってきた植物である。最初は雑草であったが、根瘤バクテリアが麦に好影響を与えることから混栽されてきたらしい。



エンドウマメを正面から見ると、こんな顔をしている(さいたま市緑区)。

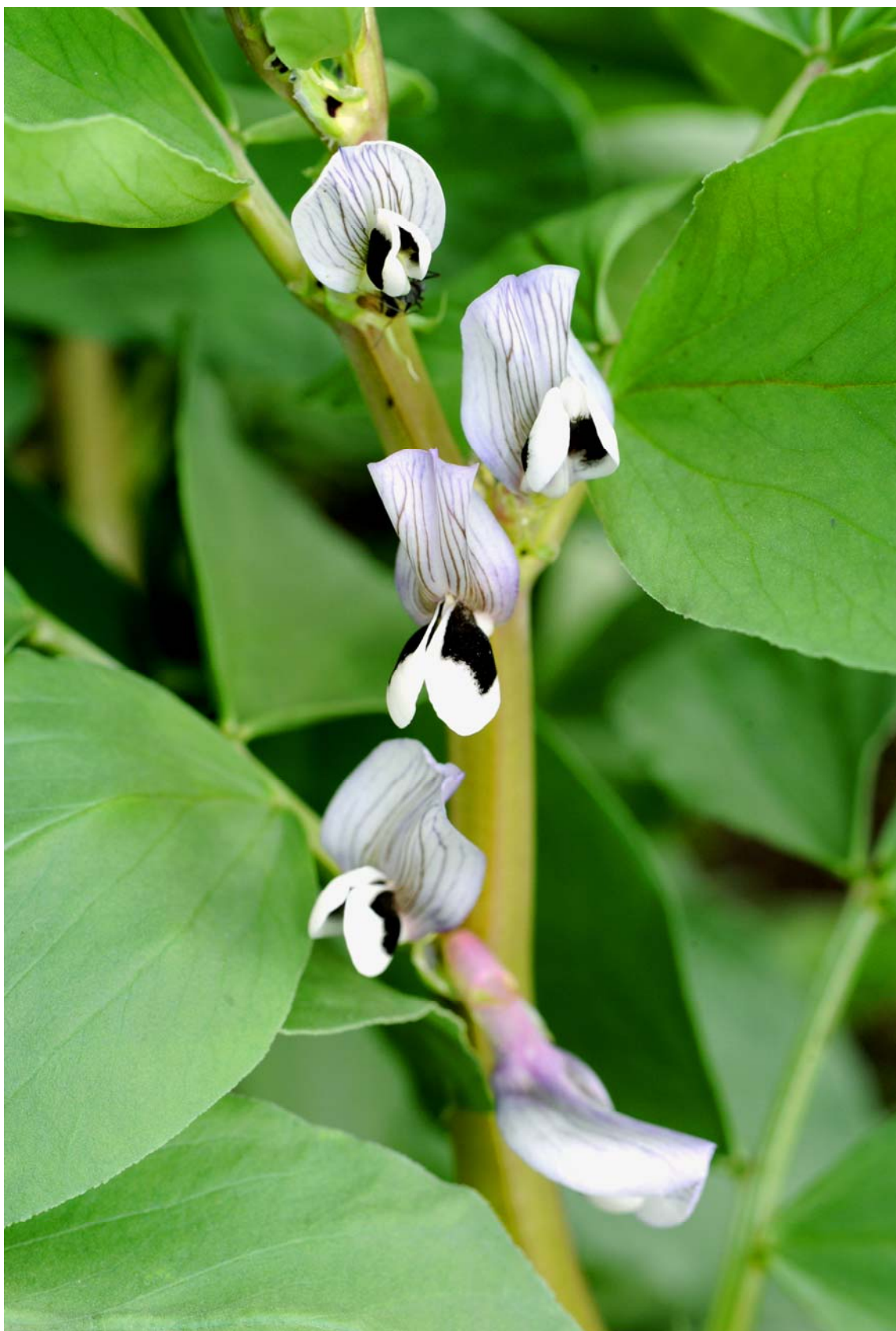


エンドウマメには白い花を咲かせるものもある(さいたま市緑区)。



ソラマメもエンドウマメと同じような経緯で改良され、今日の姿になった(千葉県館山市)。





ソラマメもエンドウマメとちょうど同じ頃に花を咲かせる(さいたま市緑区)。



ハマエンドウはエンドウに似ているところから命名された。学名は『*Lathyrus japonicus*』。 [目次に戻る](#)